

「お兄ちゃん。私ね、今度合コンに行くんだ」

土曜日の昼下がり。

いつものように部屋で私の髪の毛を編んでいてくれた侑李^{ゆうり}お兄ちゃんの手がピタリと止まった。

侑李お兄ちゃんは、私の家の隣に住んでいる五つ上の幼なじみだ。共働きで留守がちの両親に代わって、小さい頃から毎日のようにうちに来て、私の面倒を見てくれている。

大学を卒業してからも就職はせず、いつも私のそばにいてくれた。なんでもお兄ちゃんの家は大地主でマンションをたくさん持っていて、ゆくゆくはお兄ちゃんがそれを継ぐから働かなくてもいいんだそうだ。

なので、好きなだけ私と一緒にいられるらしい。

「へー。紗綾さあやが合コンだなんて、どういう風の吹き回し？」

「えっと……大学の友達に、人数が足りないからどうしても来てくれて頼まれて。新しい友達ができる良い機会だと思っし、挑戦してみようかなって」

「そうなんだ。いいんじゃない？」

私の髪の毛を手際よく編みながら、お兄ちゃんが答える。

侑李お兄ちゃんは、手先がものすごく器用で、こうして時々、私の髪の毛をとても可愛くアレンジしてくれるのだ。

なんでも、時々頼まれてバイトに行くモデルの仕事で、ヘアメイクさんに教えてもらったんだとか。

侑李お兄ちゃんとはとってもきれいな顔をしている。

185センチのすらりとした身体に、お人形みたいに小さな顔。きめ細かくて透明感溢れる白い肌。ミルクティ色の、ふわふわの柔らかいウエーブヘア。ずっと通った鼻筋。アーモンド型の猫みたいなきな瞳は、少し青みがかっていてきらきら輝く宝石のよう。

「ひいおばあちゃんが外国の血を引いていて、それが隔世遺伝で出たんじゃないかな」と前に話していた。

モデルの仕事もできたらもつとやってほしいと熱心をお願いされるみたいだけど、「紗綾と一緒にいる時間が減るから」と断っているようだ。嬉しいけど、もったいないなと思う。

お兄ちゃんなら、すぐに大人気モデルになれそうなのに。

「でも、心配だなあ。紗綾は、合コンがどんな場なのか知ってるの？」

「し、知ってるよ！ お酒を飲んで、いろんな人とお話する場ですよ？」

「間違っていないけど、大事なことを忘れてるよ。合コンって、男も来るんだよ？ 紗綾みたいに大人しくて押しに弱い子は、あつという間に変なことされちゃうかも」

「……変なことって？」

「それはもう、色々だよ。紗綾は知らないと思うけど、男っていうのはケダモノなんだよ。特に大学生なんて、いやらしいことで頭が一杯の年頃なんだから」

侑李お兄ちゃんがいつになく真面目な顔で言う。

（……警戒しすぎじゃないかな）

と思うけど、私のことを心配してくれているのだろう。

小さい頃からずっとお兄ちゃんが一緒にいてくれたから、私は男の人と付き合うどころか、男友達すらいたことがない。

「紗綾は、僕がずっと守ってあげるから」

ってお兄ちゃんは言ってくれるけど。

このまま、お兄ちゃんに守られているばかりじゃいけないと思う。私だつてもう大学生だ。自立した大人の女になりたい。いや、ならなくちゃいけない。

お兄ちゃんに頼らず、なんでも出来るようになりたい。合コンはその第一歩なのだ。

「大丈夫だよ。それも社会勉強だと思うし。せっかく大学生になったんだから、いろんなことを体験したいんだ」

「そっかあ……紗綾も大人の階段上っちゃうんだね」

なんて、侑李お兄ちゃんが寂しそうに呟いて、毛先にきゅつとりボンを結ぶ。

鏡に映る、ゆるくフィッシュボーンに編んだヘアスタイルは、私をぐつと大人っぽく見せてくれる。

「わ、すつごく素敵……！　ありがとう、お兄ちゃん」

「ふふ、どういたしまして。合コンの時も、このヘアスタイルで行ったらいいと思うよ。僕がセットするから。これに合うような服も選んであげるから、今度買いに行こう」

「ほんと？　よかったあ。どんな服装で行けばいいかわからなかったから」

「うんうん、なんでも聞いて。そうだ。合コンの作法もちやんと勉強しておかないとね。今から予習しようよ」

「合コンに、作法なんてあるんだ？」

「あるある。知らなかったら、恥をかいちゃうからさ。まずは、王様ゲームの練習をしよう」

「あつ、それ聞いた事ある。くじ引きで王様を決めて、王様が指定した番号の人が命令に従うんだよね？」

「お、詳しいな、紗綾。その通りだよ。試しに、今からやってみよう。準備するからちよつと待っててね」

お兄ちゃんはそう言うのと、メモ帳を千切ってくじを作り始めた。

「本当は割り箸でやるんだけど。今これしかないから、代用ってことで」

細く切ったくじを握り、ドレッサーの前に座っている私へ差し出す。

「はい。紗綾が一本引いて」

言われるがままに引くと、くじには「1」と書かれていた。そして、お兄ちゃんのくじには「王様」と書かれている。

「僕が王様みたいだね。じゃあ早速命令をするよ？ 1番の人は、王様にキスをすること」

「えっ!? そんな命令ありなの？」

驚いて叫ぶと、侑李おにいちゃんがジト目で私を見た。

「やつぱり、ちゃんと知らなかったんだね。合コンの王様ゲームってさ、元々エッチな雰囲気を持って行くための口実なんだよ」

「そうだったんだ……」

「王様の命令は絶対だからね？ ほら、紗綾はどうするの？」

侑李お兄ちゃんが、真面目な顔で私を見つめる。

「ど、どうするって言われても……」

「出来ないなら、こっちからしちゃうよ？」

お兄ちゃんが私の肩を抱き寄せ、身を屈めて顔を寄せてきた。

「え……っ。お、お兄ちゃん、ちよつと待つてっ……んうっ♡」

ふに、と柔らかい唇が私の口に押し当てられる。

それで終わりかと思ったのに、お兄ちゃんは唇を押しつけたまま私の唇をなぞり、はむつと下唇を挟み込んでしまった。

「ふぁ……♡お、お兄ちゃん、な、何してるの……？」

「何って、キスだよ？」

「キスなら、さつきしたよお……♡」

「それを決めるのは、王様である僕だよ？　だから……まだやめない」

ちゅ、ちゅっ。

お兄ちゃんはキスの雨を降らせるように、口の端やほつぺた、顎に口づける。

（やだ……♡なんだか、頭がぼーつとしてきた……♡）

「お、お兄ちゃん……もう、いいでしょ。わかった、からあ……♡」

「だーめ。紗綾は何にも分かってない。王様ゲームなんて、エッチなことをする口実なんだよ。だから、こんな風にされても、文句は言えないんだからね？」

「そ、そんなあ……♡」

「嫌なら、ちゃんと嫌だつて断らないと。ほら、練習。やってみて？」

今度は私の頬の輪郭をたどり、首すじにちゅうつと吸い付く。

「ひやうう……♡」

(何これ♡背筋がぞくぞく♡つてするう……♡)

練習なんだから、ちゃんと断らなきゃいけないのに。

身体がうまく動かない。

「紗綾。どうしたの？ 断らないなら、もつとしちゃうよ」

「ひぁ……♡」

侑李お兄ちゃんの指先が、私のおっぱいをTシャツごしに触る。

「な、なんでそんなところ……♡触るのお……？」

「まだ分かってないんだね、紗綾は。紗綾みたいな可愛い子は、真っ先に男に狙われるんだよ？ こうやって紗綾を逃げられなくて、エ

ッチなことをいっぱいしてくるに決まってる」

かりっ♡かりっ♡

お兄ちゃんの指先が、私の乳首を引っ搔いてくる。

(おっぱいむずむず♡して、腰がぞわぞわ♡して、変な感じ……っ♡)

「紗綾の乳首、もうぷっくり膨らんでるじゃない。ねえ、もしかして今日ってノーブラ？」

「う……ずっと家にいるから、大丈夫かなって、思ってた……」

「もう、警戒心薄すぎ。ダメだよ、そんなんじゃ」

ぴんっ♡ぴんっ♡

乳首を弾かれて、びくびくっ♡と身体が震えてしまう。

「おに、いちや……分かった……分かったからあ……♡もおやめてえ……♡」

侑李お兄ちゃんの手を押しわけようと弱々しく手を掴もうとするけれど、びくともしない。

「そんなよわよわな力じゃ、はね除けられないよ。もつと毅然として断らないと」

「そんなこと……言われてもお……♡んっ、はぁぁ……♡」

吐き出す息はどんどん熱くなつて。顔もどんどん熱くなつて。身体がふわふわして、力が入らない。

「そんなえつちな声出しちゃつて。自分からもつと触ってくださいって言ってるようなものだよ？ 紗綾はホントに隙だらけだね。こんなんで合コンなんて言ったら、すぐに男に群がられて、おっぱい好きなだけイジられちゃうよ？」

お兄ちゃんの唇が、Tシャツの上からちゅうつと乳首に吸い付く。

「ふぁ……う、うそっ♡やつ、やだぁぁ……♡」

布ごと口に含んで、口の中で転がすように舐め回す。

（ふ、服の上からおっぱい吸われるなんてっ……♡）

ちゅぱ♡ちゅぱ♡

あつという間にTシャツの胸の部分がびしょびしょ♡になって、乳首の形が露わになってしまう。

（こんなの、裸より恥ずかしいよう……♡）

「服の上からでも乳首がくつきり♡分かつちやうね。えっちすぎ。もうおっぱいびしょびしょになっちゃったし、脱いじやおうか」

「ふえ……やだ、やだあ……。もおやめてよお……。♡」

「だーめ。ほら、脱いで」

ばんざいさせられて、Tシャツを頭から引き抜かれる。

上半身裸になった私のおっぱいを手で撫で回し、お兄ちゃんがうつとりした声で言う。

「沙耶のおっぱい、思ってたより大きいんだね。こんなおっぱい、他の男が見たら絶対揉んだり吸ったりしたいって思っちゃうよ」

「そ、そんなことないもん……」

「あるよ。紗綾は女子校だったでしょ？ 若い男なんて、セックスのことしか考えてないケダモノなんだよ？」

かしかし♡くりくり♡

ぴん♡と勃起あがった乳首を指で弾かれて、「んっ♡」と仰け反ってしまふ。

さつきからおっぱいがむずむずして、胸の内側が熱くなって、変な感じ。

それだけじゃなくて、お腹の底がじくじく疼いてくるみたい……
(何だろう……これ……ちよつと怖い……)

「紗綾、オナニーもしたことないんでしょ？ おっぱいちゅうちゅう♡
♡つてされたら、すーぐへろへろになりそう」

「つふぁ……♡あう♡やつ♡やだぁ♡」

「もおやだぁ……お兄ちゃん、変なことばかり言つて……っ」

「ごめんね。でも、男はみんなこんなことばかり考えてるんだよ。
それをちゃんと教えてあげないと」

ちゅっ♡ちゅっぱ♡ちゅっぱ♡♡

お兄ちゃんが私のおっぱい吸つてるっ♡

ちゅっ♡ちゅっ♡♡つて乳首吸つて、舌で飴をなめるみたいに転がして。
て。

つんつんつて突いて、空いた手でもう片方のおっぱいの乳首をきゅ
うつと指で摘まんて。

痛いような、むずむずするような。気持ちいい……のような。

かりかりっ♡と爪の先でおっぱいの先端を引つかれると、腰がひくんと震えてしまう。

「紗綾、もしかしておっぱいで感じてる？」

「わ……かな……♡ふ、ああ……♡」

「もう……ダメだよ、こんな簡単に許しちゃったら。おしおき……だね♡」

ちゅうう♡れろれろ♡れ……♡

お兄ちゃんの舌がおっぱいを這い回り、唇でもにも♡と揉むように乳首を食んでくる。

「やだっ♡それだめっ♡……♡あ……♡あ……♡♡♡♡」

びくびくっ♡と全身が震えて、おまんこがきゅうんっ♡と縮み上が

る。

はあはあと荒い息を吐いてくつたりしていると、お兄ちゃんが私の首筋をそつと撫でた。

「もうイっちゃったの？ 紗綾つておっぱい敏感なんだね」

（今のがイク……つてことなの？ 私、お兄ちゃんにおっぱいイじられて、イっちゃったんだ……）

ふともをすりあわせてもじもじしていると、今度はお兄ちゃんの手がスカートに潜り込んできた。

「お、お兄ちゃん、な、なんでそんなとこつ……」

「だって、おっぱいだけじゃ物足りない……つて顔してるから。それに、男はみんな、紗綾みたいな可愛い子のおまんこを見たいって思ってること、教えてあげなくちゃ」

くに……♡

シヨーツの上から、指先がクリトリスを探り当てて軽く指で押されてしまう。

「はう……んっ♡」

それだけで電気が走ったみたいにビリビリ痺れて、身体がびくんびくん♡してしまう。

「ちよつと触っただけなのに、びくびく♡しちゃって……だめだよ、さつきからイってばかりじゃない」

「だって……♡だってえええ……♡お兄ちゃんがえっちな触り方するからあ……」

「言い訳しないの。それに、そんな可愛い声で言われても、男は興奮するだけだからね？」

かり♡かりっ♡かしっ♡かしっ♡

なじるようにクリのききっぱを引つかかれると、お腹がじんわり熱くなつて身体から力が抜けて、動けない。

くにくに♡ぐにいゝ♡

お兄ちゃんがクリを指でこねこね♡してくる。

どんどん快感が増していつて、自分でコントロールできなくなっていくのが怖い。

「やあ……♡もう分かったからあ……♡やめて、やめてえ……♡」

「ほんとに分かつてる？」

「分かつてる……からっ……♡やつ、ああっ……♡♡」

おしおき、と言わんばかりに指でクリを摘ままれて、ショーツの布ごとひっぱってぐにいと押し潰される。

「ほら、もうショーツがおもらししたみたいにぐつしより♡だね。クリもこんなにぷっくり♡おつきくしちやつてさ。こんなよわよわおまんこ、あつという間に男の餌食だよ。こんなんで合コン行くなんで無茶でしょ？」

「やだあ……♡こんなのいつものお兄ちゃんじゃないよお……♡どうしちゃったの……っ」

「……お兄ちゃんだって、男なんだよ？」

侑李お兄ちゃんが、じつと私を見つめる。

いつもの、優しく私を慈しむような顔とは全然違う。

大きな瞳いっぱい、淫らな欲望がたたえられていて。

ぞくつ、と腰が甘く震えてしまった。

（なんで、私……こんな……っ♡）

「僕、ほんとに紗綾を合コンなんて行かせたくない。大事な紗綾を他の男に取られるかもって思っただけで、頭がどうにかなりそうなんだよ」

「……っ」

はっと息を呑む。

——こんなお兄ちゃんの顔、初めて見た。

揺らめく瞳は不安と焦燥に満ちていて。

そして、私を独り占めしたいという強い欲望が入り交じって。

まさに……『オスの顔』をしていた。

「ねえ、本当に嫌ならハッキリ断ってくれないと、僕、もう歯止めが効かなくなっちゃうよ？」

侑李お兄ちゃんが私の手を取り、自分の頬に当てて切なげに吐息を

漏らす。

（ああ、そつか。私……やつと分かった）

お兄ちゃんにえつちなことされても、怖いとか嫌だとか思わなかったのは。

私がお兄ちゃんを、男の人として見ていたからなんだ。

私は、もう片方の手をお兄ちゃんの肩に添え、ぎゅ、と力をこめた。

「……嫌じゃ、ないよ。お兄ちゃんなら私……何をされても、いい」

「ああ……紗綾……っ。そんな健気なこと言われたらもう……僕……」

我慢、出来ないよ……！」

「して♡いっぱい私に……えつちなこと、して……っ♡」

侑李お兄ちゃんの端正な顔が、くしやりと歪む。

いつもの優しく穏やかなお兄ちゃんとは違う、切なさが滲んだ顔で

—
そんな顔も綺麗だな、と見とれてしまった。